滋賀県立愛知高等女学校における「花」「茶」の受容

──学科目「農業」との関連を交えて──

小 林　善 帆

Introducing the Instruction of "Ikebana" and "Cha-no-yu"
into the Echi Girls' High School in Shiga Prefecture ：
Bring in Instruction of "Agriculture"

KOBAYASHI,Yoshiho

愛知川町史研究 第３号 別刷
愛知川町教育委員会　町史編さん室
2005 年 3 月

滋賀県立愛知高等女学校における「花」「茶」の受容

―学科目「農業」との関連を交えて―

小林善帆

はじめに

大正一一（一九二二）年四月に開校した滋賀県立愛知高等女学校（以下、愛知高女と記す）は、明治四三（一九一〇）年四月に開校した滋賀県愛知郡立愛知実業学校女子部を前身に持つ。この実業学校女子部の教育実態並びに「花」「茶」の位置や役割については、前稿「実業学校における「花」「茶」の受容 ―滋賀県愛知郡立愛知実業学校女子部を事例に―」（『愛知川町史研究』第二号、以下、前稿と記す。）において述べた。

本稿は、実業学校女子部から高等女学校への改組後も、学科目に全国に類例の少ない「農業」を置き（1）「花の学校」と称された（2）、愛知高女の教育実態を明らかにし、前稿から引き続き「花」「茶」（3）の位置や役割を、植物を扱うという点で「花」との接点を持つ学科目「農業」との関連を交えながら、考察するものとする。

また前稿「はじめに」において、「花」「茶」の位置や役割を考察することから、「花」「茶」の女性受容人口の増大を決定的にした要因が、女子中等教育における取入れであったか否かを明らかにする必要があると述べたが、この点についても言及したい。

一 高等女学校としての開校

愛知実業学校女子部は、「勤労教育、郷土教育を思ひ切って実際に施し、時宜に適した農村中堅男女養成の教育機関として頗る好評を博して、県内は勿論、全国各地から参観者引きも切らず、その数は年々五百名を下らなかった」が、経費の点では経営難であった（4）。

大正後期、教育機関拡張の声が全国を風靡するなか、同校においても経営難などの理由から県移管を陳情した。審査の結果、県当局から設立条件として、敷地一三〇〇〇坪（後に一二〇〇〇坪に改められる）の価格約五万円と更に金五万円、計一〇万円を準備することが提示された。そこで関係者が努力を重ねた結果一〇万円が整えられ、愛知実業学校女子部は県立に移管されるとともに高等女学校に改組、開校。他方、同校男子部は愛知郡農会の経営に移り、愛知実業講習所とな

った（5）。

滋賀県下では、長浜町立長浜高等女学校と滋賀県日野高等女学校（日野町立）が同じく大正一一（一九二二）年四月、県立に移管している（6）。愛知高女は両校とともに、大津高等女学校、彦根高等女学校に次ぐ県立高等女学校となった。

開校当初本科四年制、各二学級、卒業後の進学課程として補習科一年制が設置され、定員は補習科も含めて四五〇名であった（7）。初年度は、愛知実業学校女子部は三年制であったため、同校新二、三年生はそれぞれ愛知高女の三、四年生の編入試験を受け、一、二年生については入学試験が行われた。生徒は愛知郡、神崎郡、犬上郡を中心に、蒲生郡に住む者や他府県からの者が若干あった（8）。

二　学科課程

愛知高女本科の学科課程を記す史料は確認できない。このため校報『愛声』（9）「各職員担任学科」の記事（10）から、当時の学科目等を推測すると、

修身・国語（習字）・英語・歴史・地理・数学・化学・物理・図画・家事・裁縫・手芸・音楽・体操・博物・法経・教育・農業（以上、正課学科目として）

「花」・「茶」・「琴」（以上、学課外として）

があったと思われる。右の学科目等は本科だけでなく補習科の学科目（博物・教育）も含まれている。また「花」「茶」は「琴」とともに「課外のお稽古」として放課後に希望者のみに教えられるものであった（11）。

学科目「農業」は、大正九（一九二〇）年に出された「高等女学校令施行規則中改正」（文部省令第一五号）（12）によると、第一条から、学科目として土地の情況に依り新たに教育、法制、経済、手芸、実業を加えることができるようになったこと、第一五条ノ三に実業とは農業、工業、商業をさすとあることから、同校において設置が可能であったことがわかる。

（表1）

学科目	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年
修　身	2	2	1	1
国　語	6	6	5	5
外国語	3	3	3	3
歴史/地理	3	3	2	2
数　学	2	2	3	3
理　科	2	2	3	3
図　画	1	1	1	
家　事			2	4
裁　縫	4	4	4	4
音　楽	2	2	1	
体　操	3	3	3	3
計	28	28	28	28

同第一六条に、学科課程及毎週教授時数が（**表1**）のように定められ、各学年の毎週教授時数の総計は三〇時を超えてはいけないことなどが見出される。愛知高女本科の学科目並びに時間配当はこの範疇にあったといえよう。

他方、愛知高女本科の学科目「農業」の取り入れについては、「正科」で「各学年を通じて毎週二時間」であった（13）とある。

以上のことから、愛知高女本科の学科課程及毎週教授時数は、おおよそ前頁の表の学科目と教授時数に、「農業」各学年二時間を

加え、合計各三〇時間であったことが考えられる。それとともに「花」「茶」「琴」が「課外のお稽古」として、放課後に希望者のみに教えられていた。

次に、本科卒業後の進学課程である補習科の学科課程については、「補習科学科課程及毎週教授時数表」(14)が残されている。それによれば、

修身　一・国語　三・理科　一・家事　四・
裁縫一一・音楽　一・体操　二・教育　三・
手芸　三・実業　一（園芸実習）
計　三〇（時数）

が教えられたことがわかる。「花」「茶」「琴」は本科同様に「課外のお稽古」として放課後、希望者のみ教えられていた。

その後昭和八（一九三三）年三月の補習科廃止に伴い、同年四月から、同校同窓会である錦郷会の経営による裁縫研究科が設置された。修業年限は一ヶ年であったが、希望により続いて数ヶ年修学できた。教えられたのは裁縫を中心に手芸、家事、修身、国語（実用作文習字）、講話。希望者のみに、「花」「茶」音楽などがあった(15)。

本科だけでなく補習科や裁縫研究科においても、「花」「茶」は本科と同様放課後に希望者のみに教えられるものであり(16)、その意味で「花」「茶」は課外活動であった。

三　課外活動

愛知高女は、大正一三（一九二四）年一〇月新校舎へ移転、大正一四（一九二五）年九月には校報『愛声』が発刊された。また大正一五（一九二六）年一月、校訓「正しく、強く、優しく」が定められるなどしている(17)。このように教育内容が充実していくなかで、課外活動も活発に行われた。以下、具体的に見ていきたい。

①関東地方修学旅行

第一回関東地方修学旅行は(18)、大正一五（一九二六）年五月二三日から二九日まで六泊七日で行われた。第四学年（在籍九三名）と補習科（在籍一九名）の合わせて一一二名を対象としたもので、参加者は六一名。欠席者の理由は、家庭の経済上已むを得ざるもの、農繁の季節で人手が必要のためであったという。修学旅行は以後参加者を増やし同様に毎年行われた。しかし昭和一四（一九三九）年五月の関東旅行から、三泊四日に短縮された。以下、第一回の旅行は、

目的
・明治神宮の参拝を兼ね帝都を見学
・先帝の英霊に接し日本文化がどのように発展しているかを観察
・日光その他関東における地理として歴史としての勝地

を探る

行程

五月二三日　午後　稲枝発
二四日　午前　藤沢着　江ノ島　鎌倉　横須賀　東京
二五日　東京滞在
二六日　中禅寺湖泊
二七日　東京泊
二八日　東京駅発
二九日　午前能登川着。

江ノ島から大仏、鶴岡八幡宮、横須賀軍港ならびに軍艦山城の内部見学。横浜市街や鎌倉では、大正一二（一九二三）年の震災が如何に強震であったかを感じたという。日光東照宮、華厳の滝、中禅寺湖、東京宮城に跪拝、新宿御苑、また東京駅界隈の震災後の復興の様子を目の当たりにした。旅館に宿泊して生徒の家族親戚の訪れ来るのも夥しかったという。

東京では遊覧バスにも乗った(19)。愛知郡八木荘村（現・秦荘町）出身で滋賀県犬上・愛知両郡からなる選挙区選出の堤康二郎代議士(20)を交え食事もした。夜の銀座へも出かけている。

また大正一五（一九二六）年、伊吹山（滋賀・岐阜両県の境にある山、標高一三七七メートル）への登山者数が例年に比べ激増し、百十余名になった。以後戦争が激しくなるまで七月二〇日前後に実施し続けられている(21)。学校内の学習だけでなく広く見聞を広める機会が学校側から設けられるとともに、生徒側も求めたといえよう。

②校友会活動

校友会（生徒会）活動もおこなわれた。昭和二（一九二七）年四月の時点で、校友会には以下の部が置かれている(22)。

総務部・庶務部・会計部・購買部・（陸上）競技部・テニス部・水泳部・登山部・ピンポン部・図書部・園芸部・音楽部・家事手芸部・書画部・茶儀部・生花部

昭和三（一九二八）年には弓道部、編輯部、昭和四（一九二九）年には排球部、籠球部、スキー部が加わった(23)。高等女学校開校当初、課外の活動は「花」「茶」「琴」のみであったと思われるが、まもなく各種運動などに広がったことがわかる。昭和一三（一九三八）年に排球部が優勝するなど学外の競技会で優秀な成績も残している(24)。

また、稽古事として放課後に希望者のみに教えられた「花」「茶」が、運動競技や水泳、登山などとともに校友会活動（部活動）として位置づけられたことがわかる。このことは「花」「茶」の役割に、稽古、たしなみのほか、「趣味」(25)という意味合いが加わったと考えられる。

③報国団

昭和一六（一九四一）年九月一日、校友会が解消され、滋賀県立愛知高等女学校報国団が結成された(26)。報国団とは、

「皇国青少年学徒としての自覚と使命とに徹底すべき新修練組織」である。組織構成等は以下のようであった。

総務部　庶務班、会計班
鍛錬部　排球班、籠球班、庭球班、卓球班、競技班、武道班、団体班
国防訓練部　（班はなし）
学芸部　図書班、校報班、教養班（音楽班、書画班、文芸班、科学班、裁縫班、手芸班、珠算班、整備班、生花茶道班）
生活部　衛生班、購買班
生産部　農耕園芸飼育加工其ノ他ノ作業

注目すべき点は、「従来の課外運動時を拡張、晴天時は鍛錬各班の運動練習、雨天時及び冬季は教養各班の研究練磨を行ふことになつたこと、鍛錬部各班を検討、籠、排、庭、卓球及び武道の各班は三四年、走跳班は一二年とし、各組の約半数がこれに参加、残り約半数は団体班に属して、心身の練成を行ふことになったこと等」であったという。

報国団課外活動の一例として、同年九月五日の夜間行軍について見てみると、

午後七時半学校出発、報国隊の組織により（中略）中仙道を南下、老蘇、武佐、六枚橋を経て月明の下、八幡町に入る。八幡神社に於いて国威宣揚皇軍将兵の武運長久祈願をなし、八幡高女に到って休憩（中略）午前二時帰途につき安土、能登川を経て午前七時帰校。行程三十二粁。

学校生活が戦時色の強いものとなっていることがわかる。以後、毎年行われた。このようななか「花」「茶」は、学芸部教養班に生花茶道班として位置づけられ、「修練」としての役割をもつようになった。雨天時及び冬季に教養各班の研究練磨とあるものの、「花」「茶」の場合、修養を積むための稽古事として他の活動とは別に、放課後に希望者のみに教えられることに変わりなかったと思われる。

四　学科目「農業」と「花」

愛知高女は昭和七（一九三二）年ころには校庭に五つの花園があり、温室には四季折々の草花が咲いていた。このため誰が言うともなく「花の学校」と言われていたという(27)。同校が正課学科目に「農業」を置いたことや、それにともない園芸実習場が造られたこと、また園芸部（校友会）や教師間、クラス活動としての園芸作業があったことなどが影響していよう。このような状況のなかで「農業」は、植物を扱うという点で「花」と接点を持つ学科目である。以下「農業」と「花」について見ていきたい。

昭和五（一九三〇）年頃の「農業」に関する教育内容や、園芸実習場である蔬菜園、花圃（前庭・中庭・西庭）、神饌園、

果樹園、生花材料園は以下のようであった(28)。

蔬菜園　各種の苗類の養成、秋蒔甘藍（キャベツ）施肥中耕、莢豌豆（さやえんどう）の支柱建、瓜哇薯（ジャワイモ）の植付、春蒔白菜や菜豆の下種、茄子胡瓜（キュウリ）に蕃茄（トマト）南瓜（カボチャ）の苗の移植、苺の敷藁など。

花圃　ダリア、カンナ、水仙類、グラジオラス、アネモネ、ヒヤシンス、美女桜（バーベナ）、三色菫（パンジー）、アゲラタム、ペチュニア、菊、朝顔、その他数十種の草花を栽培。

神饌園　天皇即位御大典記念事業（昭和三年）として設けられた蔬菜園。蔬菜花弁の産物を御幸祭や八幡神社ほか氏神の春秋の祭典にお供え。

果樹園　桃、李、ほかに葡萄、柿、梅などを栽培。

生花材料園　校友会生花部の活動によって生花材料を豊富に栽培。エニシダ、カイヅカイブキ、フイリイヌツゲ、チョウセンガヤ、ギンマサキ、オウゴンクジャクヒバ、オウゴンシノブヒバ、キラボク、ハナズオウなど。

盆栽類　校長室や各学修室、図書室その他の装飾用としてまた四大節その他の儀式用として棕櫚竹（しゅろちく）、槙柏（しんぱく）、五葉松（ごようまつ）などが多数準備された。それを一年生の当番が管理。しかし管理は鉢物の為、相当困難であったという。

花の会　昭和四（一九二九）年から始められた。初夏に一年生が一般の草花を、秋季に二年生が菊とダリアを出品して催した。「花」（いけばな）の会ではなく、優良な種苗、草花を競う会であった。しかしそれらは家庭で栽培されたものが出されたという。

そのほか二年生で養鶏、三、四年生で養蚕が教えられた。昭和八（一九三三）年からは四年生で水田稲作実習もはじめられている。

ここで改組前（実業学校女子部）と改組後（愛知高女）の農業教育を比較すると、改組前も農業に関する学科目を持ち、畜産、養蚕はもとより蔬菜、草花、果樹の栽培等がなされていた。しかしその園芸実習場（愛実園）で作られた草花は、学校の方針として生徒の家庭の仏前供花のための花材と位置づけられたものの、課外で教えられた「花」のためとはされていない。また植物、気象、昆虫などの観察、整理分類について教えられた(29)。

これに対し改組後は、園芸実習場の草花を家庭の仏前供花のためとは位置づけていない。同校では校友会生花部の生花材料栽培を目的とし、園芸実習場の一つとしての生花材料園を設け、豊富な花材を提供した。また盆栽の手入れを教え、優良な種苗、草花を競わせている。

このことから、「花」は同じく正課時間外（放課後）に設置され希望者のみを対象としたが、花材調達において、改組前と改組後とでは異なるといえる。「農業」教育の主眼が先祖への尊敬、植物などの観察、整理分類というものから、より実生活に必要な植物の栽培という教育内容に変化したと考えられる。それは実業（農業）学校と高等女学校の「農業」に関する教育の在り様の違いでもあろう。

高等女学校の場合、良妻賢母の在り様として、より積極的に副業としての農業（特に野菜や花作り）に携わることができるようにという指導がなされたと考える(30)。他方、生花材料園の植物の種類から、同校では「生花」様式の「花」(31)が教えられたと思われる。

次に、愛知高女における「花」「茶」受容の詳細を見ていきたい。

五　「花」「茶」の受容

前身である実業学校女子部では本来、「農業学校規定」(32)、「実業補習学校規定」(33)に、「花」「茶」が定められた学科目としてあるわけでなく、同校の学科課程の学科目のなかに「花」「茶」が置かれることはなかった。しかし開校当初から正課時間外（放課後）に設置され、希望者のみを対象とした。法令の如何にかかわらず同校において女子のたしなみを身につけるものとして必要と考えられ、学課外に設置されていたのである。

高等女学校における「花」「茶」受容の規定においても、明治三二（一八九九）年「高等女学校令」（勅令第三一号）に伴う「高等女学校ノ学科及其程度ニ関スル規則」（文部省令第七号）(34)に学科目として定められていたわけではなかったが、明治三六（一九〇三）年一二月二四日付の各地方庁へ普通学務局通牒（卯普甲三四八七号）(35)「高等女学校ニ於テ土地ノ情況ニ依リ必要ナル場合ニ限リ正科時間外ニ便宜茶儀生花箏曲等ヲ教授スルハ差支無之」により、正科時間外に「茶」「花」「琴」を教えることは差し支えないとされた。

さらに明治四一（一九〇八）年「高等女学校令施行規則中改正」（文部省令第二〇号）(36)が定められたが、そのなかで学科目について「文部大臣ノ認可ヲ受ケ随意科目トシテ土地ノ情況ニ依リ必要ナル学科目ヲ加フルコトヲ得」と改正されている。このことは、必要であれば「花」や「茶」を随意科目として学科目に加えることができることを意味した。

このように実業学校女子部から高等女学校への改組は、法令上「花」「茶」を随意科目として正課時間内に取り入れることを可能とした。しかし愛知高女においても「花」「茶」を随意科目として取り入れることはなかった(37)。以下、見ていきたい。

大正一五（一九二六）年三月一五日発行の『愛声』八号には、「課外のお稽古」と題して次のように記されている。

茶の湯、生花、琴は女子のたしなみとして従来も課して来たのでありますが、稽古の日になると、どの学年でも

単に希望の者のみ僅かで、多少遺憾の点がありました。女子としては其の大要なりとも心得さして置く必要を認めますので、来四月からは稽古日を左記の通り定めまして、可成全部の生徒に稽古させたいと思ひます。随つて当日生徒の帰宅時刻の後れることを予め御承知置下さい。

火曜（茶）三年甲（四年補習科随意）
木曜（花）二年甲（同　　）
金曜（茶）三年乙（同　　）
土曜（花）二年乙（同　　）
同　（琴）全部随意

琴は特別の希望者にのみ課します。尚一年は総てに通じて可成見学を致させます。

右の記事から、愛知高女において生徒側はそれほど「花」「茶」の稽古を望んでいないにもかかわらず、学校側の意向として少なくとも一年間はほぼ全員の生徒に、「花」「茶」をたしなませる必要があると考えていたことがわかる。しかし一度に五〇名余の生徒が、決められた時間内で稽古をおこなうわけであるから、まさに「大要なりとも心得さして置く」内容であったといえよう。

その後、昭和一二（一九三七）年四月一五日発行の『愛声』一二七号に、

木曜日放課後は、点茶（希望者のみ）
土曜日放課後は、生花（希望者のみ）

と記されている。大正一五（一九二六）年の場合と比較して、設置時間が半分になっていることから、希望する生徒が少なくなったと考えられる。

また校友会活動の一つとして位置づけられる一方で、「花」「茶」のみが放課後のお稽古として位置づけられている。このことはほかの高等女学校においても同様のことがいえる(38)。

これらのことからは「花」「茶」は、趣味として楽しんだり技能を身につけたりする部活動としての性格のほか、女子のたしなみを身につけさせるという学校側の意向を持つものであったと考えられる。しかし希望者はそれほど多いわけではなく、内容もまさにたしなむ程度であった。「花」「茶」はむしろ高等女学校卒業後、嫁入り前の稽古事と捉えられている(39)。また学校によっては流派名を明らかにして教える場合もあったが、同校において「花」「茶」の流派は問われていないようである(40)。

六　進学・社会教育の場として

校報『愛声』には次のような校長の言説が見出せる。

本校は他の高等女学校に比べて別に違つたことを教へるわけでありません。その学科課程は大体同じであります。たゞ本校は農業を正科に取入れてゐるところが、他の女学校と特異な点であります。各学年を通じて毎週二時間

を課してをります。

本校は勤労作業を重んじます。何事もぢみでせつせとよく働く、これが本校の前身である愛知実業学校時代からの伝統の美風であります。（以下省略）(41)

「各学年を通じて毎週二時間を課してをります」ということから、農業教育が重視されたことがわかる。またその農業教育は世に知られるところであった(42)。

しかしその一方で卒業時に三割程度の上級学校などへの進学もみられる。昭和二（一九二七）年三月の場合、卒業生百余名に対し同校補習科二一名、京都女子専門学校二名、東京女子医学専門学校一名（競争倍率八倍であった）、東京共立女子職業学校一名、大津女子師範二部五名、裁縫学校ほか六名、計三六名が進学している(43)毎年進学先はおおよそこのようであった。どの年も東京の医学専門学校へ進学者を出していることが注目される。さらに昭和九（一九三四）年二月のように、難関の奈良女子高等師範学校と東京女子高等師範学校に各一名が合格したこともあった(44)。

進学ということだけでなく、教養を高める努力もなされた。校舎玄関上の二階廊下に新聞閲覧台を設け、大阪朝日新聞をはじめその他東京各紙を置き、生徒に自由に展観させ、授業の際その質問に応じた。生徒は熱心に新聞を読んだという(45)。

また同校は、女子の社会教育の場としての機能も果たしている。昭和五（一九三〇）年七月二六日から同三一日までの六日間、滋賀県聯合処女会から学校長に依嘱され、第一回短期女学校が催された(46)。その科目を見てみると、

修身公民（　八時間）　国　　語（　四時間）
地　　歴（　五時間）　家事理科（一一時間）
裁縫手芸（　八時間）　音楽体操（　九時間）
（寄宿舎への）入舎生に限り夜、課外としてマッサージ実習（　六時間）

「作法」は修身公民に含まれていたようであるが(47)、「花」「茶」は科目にはなかった。高等女学校という場が必ずしも「花」「茶」を教えるべきところと捉えられなかったといえよう。また処女会(48)は学校卒業後結婚までの女子の集まりであり、参加者はすでに個人的に結婚前の習い事として「花」「茶」を習っていたことが考えられよう。以後五〇名程度の参加で同様に毎年催されている。学科に実業（園芸・養蚕・稲作）が入れられることもあった。それとともに昭和八（一九三三）年からは、愛知郡農会主催本校後援の愛知農業短期女学校も年一回開かれている。また翌昭和九（一九三四）年二月、愛国婦人会滋賀支部滋賀県立愛知高等女学校愛国子女団が設置され、全校生徒が加入した(49)。

おわりに

校長の言説や、学科目「農業」のための園芸実習場の設置をはじめとする農業教育の充実からは、愛知高女が実業学校

女子部時代からの伝統を受け継ぎ、勤労を重んずる教育を行ったことがわかる。また改組後は、園芸実習場で校友会生花部の活動により花材の栽培も始められた。しかし他方で上級学校、なかでも難関校に進学する者さえみられたことなどから、同校の教育が勤労作業のみに終わるものでなかったことがわかる。

同じく滋賀県下の大津高等女学校や彦根高等女学校と比べてみても、学科課程、教育活動全体の在り様に大差はない。正課学科目「実業」はこの両校でも設置されている。

愛知高女の「花」「茶」の受容は、大正一一（一九二二）年改組後当初、改組前と同様にたしなみとして学課外に設置された。しかしその必要を認める学校側の考えとは裏腹に、生徒側からの受容は減少した。改組以後県立の高等女学校として、教育環境や学課外活動が整い、女子の社会教育の場としての機能が果たされるなかで、校友会活動が設けられ、卒業後や家庭でも習得可能な「花」「茶」よりも、高等女学校の外では習うことが難しい運動部や文化部が選ばれたのは、当然の成り行きであろう。

また、改組前と同様に「花」「茶」を「課外のお稽古」と位置づけ、たしなみという役割を持つものとする一方で、その位置づけと役割を踏襲しながらも、校友会活動としての位置づけからは「趣味」、報国団活動としての位置づけからは「修練」という役割が加わった。さらにむしろ「花」「茶」は、高等女学校卒業後結婚までに習得するものと捉えられている。

「花」「茶」は、実業学校女子部以来一貫して課外といえども設置された。しかし改組後の大正後期から昭和初期の愛知高女において、多くの生徒の受容があったとは考え難い。また学科目「農業」が置かれたことと勤労教育が重視されたこととは関連づけられるが、学科目「農業」と「花」については、「花」に使用する花材が栽培されたことに止まる。それは「農業」が家庭における女子の副業と考えられたことと関係していると思われる。

これらのことから、「花」「茶」の女性受容人口の増大を決定的にした要因が、女子中等教育における取入れであったか否かについて、愛知郡立愛知実業学校女子部ならびに県立愛知高等女学校の「花」「茶」の受容事例のいずれからも、「花」「茶」の女性受容人口の増大を決定的にするほどの受容があったとは言い難いといえる。

註

（1）「過去十年を顧みて」『愛声』創立十周年記念号（昭和七年一二月一五日発行）。滋賀県下の他の県立高等女学校の場合を見てみると、長浜高等女学校は昭和三年以後、正課学科目「家事」の一分科として「園芸」が教えられている（『記念誌』長浜北高創立六十周年記念事業実行委員会、一九七〇年、二二頁）。大津高等女学校は昭和期、正課学科目「実業」（一時数）を置き、そのなかで「園芸」（一～三年）「商業」（四、五年）が教えられた（『滋賀県立大津高等女学校五十年史』滋賀県立大津高等女学校、昭和一五年、八六～九二頁）。彦根高等女学校は昭和四年以後、正課学科目「実業」（一時数）を置き、三、四、五年に「商業」が教えられた（『彦根西高百年史』彦根西高百年史編集委員会編、滋賀県立彦根西高等学校　一九八七年、四四六～四四八頁）。日野高等女学校の学科課程からは学科目「実業」も、細目にしろ「園芸」も見出せない。しかし卒業生の思い出からは昭和一〇年頃、学校の農園で野菜つくりをして食したり、売りに行ったりしたことが書かれている（『創立９０周年記念誌』滋賀県立日野高等学校、平成七年、三三頁）。各校いずれも「園芸」や「商業」は教えられているが、学科目「農業」としての受容は見出せない。

（2）「本校入学に就いて」（笹川新太郎校長）『愛声』七三号（昭和七年二月一五日発行）ほか。

なお笹川新太郎校長は、在職期間：一九二八（昭和三）年四月～一九三三（昭和八）年八月。在職年数：五年五ヶ月。前任校：滋賀県女子師範学校教頭。

（3）女子中等教育において、花材を扱う学習については「挿花」「生花」「花道」、茶の湯に関する学習については「点茶」「茶儀」「茶道」などと様々に使用されているため、ここでは、それぞれを統一する用語として「花」「茶」という用語を使用した。また「花」「茶」はそれぞれ別個の歴史を持つものであるが、ともに「国語」「修身」等学科目とは異なる教育体系を有し、女子中等教育のなかでひと括りに扱われていることが多いため、そのような点を考慮して扱った。

（4）『滋賀県立愛知高等女学校　十五年小史』（滋賀県立愛知高等女学校校友会錦郷会、昭和一二年、以下『十五年小史』と記す）一～二頁

（5）『十五年小史』三～七頁

（6）「新県立学校　開校と県の方針」『大阪朝日新聞京都附録』大正一一年一月二一日発行。大正一二年、滋賀県下の高等女学校は、滋賀県立では大津高等女学校（大津市）、彦根高等女学校（犬上郡彦根町）、日野高等女学校（蒲生郡日野町）、長浜高等女学校（坂田郡神照村）。そのほか町立八幡高等女学校（蒲生郡八幡町）、組合立甲賀郡寺庄高等女学校（甲賀郡寺庄村）、市立大津実科高等女学校（大津市）、町立水口実科高等女学校（甲賀郡水口町）、町立木ノ本実科高等女学校（伊香郡木ノ本町）、町立草津実科高等女学校（栗太郡草津町）、町立信楽実科高等女学校（甲賀郡長野町）が開校していた。その後私立淡海高等女学校（神崎郡五個荘村）、町立大溝実科高等女学校（高島郡大溝町）、町立高宮実科高等女学校（犬上郡高宮町）が開校した（『高等女学校資料集成』第一六巻、大空社、一九

九〇年）。大津高等女学校、彦根高等女学校が県立に移管されたのは、明治三五年であった。

（7）『十五年小史』八頁。昭和一五（一九四〇）年四月から五年制となる。さらに昭和一七年四月から、本科学級増加として、八学級（定員四百名）から一五学級（定員七五〇名）に拡張された。

（8）「過去十年を顧みて」『愛声』創立十周年記念号（昭和七年一二月一五日発行）。一学年の定員は約一〇〇名、志願者は最高で一四四名（大正一五年）になった。常に志願者は定員を上回っていた（『十五年小史』五三頁）。

（9）『愛声』は大正一四年九月発刊、八月を除く毎月一回、生徒の父兄母姉諸氏並に卒業生、其他有志の人々に配布していた。昭和一八年九月一日発行第一七〇号を以て休刊。昭和二二年一月再刊。「愛声」とは、「女子の特長として、又最大任務とする愛情の涵養に努むる本校の声」であるという。

（10）『愛声』四号（大正一四年一一月一五日発行）

（11）『愛声』八号（大正一五年三月一五日発行）

（12）『高等女学校関係法令の沿革』調査資料 第二輯（文部省教育調査部、一九四一年）一四七～一五一頁。

（13）「本校入学志願者並に其の父兄母姉各位へ」（藤川助三校長）『愛声』一〇五号（昭和一〇年二月一五日発行）。

なお藤川助三校長は、在職期間：一九三三（昭和八）八月～一九三五（昭和一〇）八月。在職年数：二年一ヶ月。前任校：滋賀県彦根高等女学校教頭。転任校：滋賀県彦根高等女学校校長。

（14）『愛声』六二号（昭和六年二月一五日発行）、同五一号（昭和五年二月一五日発行）。補習科に進学すると、小学校教員の検定試験を受験することができた。

（15）『愛声』八三号（昭和八年二月一五日発行）ほか。

（16）（11）に同じ。

（17）『十五年小史』一三頁。

（18）『愛声』一〇号（大正一五年五月一五日発行）、同一一号（大正一五年六月一五日発行）。彦根高等女学校では大正九年から、大津高等女学校では大正十年から（同校補習科は大正八年から）、同様の関東地方への修学旅行が始められている。

（19）「関東旅行の印象」『愛声』一二〇号（昭和一一年七月一五日発行）。

（20）『堤康次郎』由井常彦編著、株式会社エスピーエイチ、一九九六年。「四　堤政務次官講演」『十五年小史』三三頁。

（21）「伊吹登山」『愛声』一三号（大正一五年九月一五日発行）ほか。大津高等女学校では大正九年七月から比良登山が始められた。

（22）「校友会役割と担当諸先生」『愛声』二〇号（昭和二年四月一五日発行）。

（23）「校友会役割と担当諸先生」『愛声』三一号（昭和三年四月一五日発行）。「校友会役員任命」『愛声』四三号（昭和四年五月一五日発行）。

（24）「県下体育大会出場　排球部優勝」『愛声』一四三号（昭和一三年一一月一五日発行）。しかし彦根高等女学校（『彦根西高百年史』彦根西高百年史編集委員会編、滋賀県立彦根西高等

学校、一九八七年）をはじめ他の高等女学校の運動部の活躍に比べると、愛知高女の運動部活動が活発であったとは言い難い。「農業」関連の作業に精力が傾けられたことも一因と考える。

（25）「展覧会」『愛声』九三号（昭和九年一月一五日発行）は、「婦人の趣味として読書、和歌、俳句、手芸、生花、音楽」というように「花」を趣味と捉えている。大津高等女学校でも昭和初期、「女子として必要なる趣味技能を養成す」として「花」「茶」を四、五年生と研究科を対象に、取り入れている。それは正課学科目としてではないものの、五年生の「精神の徹底」として「準正科として課する薙刀道、花道、茶道、マッサージ術」と記されている（『滋賀県立大津高等女学校　昭和一五年、一一二、一一六頁）。同様の受容例は大阪府立岸和田高等女学校に見られる。加藤恵津子氏は、『〈お茶〉はなぜ女のものになったか』（紀伊国屋書店、二〇〇四年）一二三・一二四頁において、戦前（第二次大戦）に女学校生活を経験した女性にとって、「茶」が「望ましい趣味」であったことを指摘している。

（26）「本校報国団々則」「学校日誌抄」『愛声』一五九号（昭和一六年一〇月一日発行）。同年四月、彦根高等女学校でも同様に校友会は解散、報国団が結成された。このことは、ほぼこの時期同様に全国の中学校・高等女学校で行われている。

（27）（2）に同じ。「先生の花造り」『愛声』六六号（昭和六年六月一五日発行）によれば、生徒たちだけでなく、校長（笹川新太郎）をはじめとして教師自らも学校の花園化を競って実践したという。

（28）「思ひの侭に」『愛声』五二号（昭和五年三月一五日発行）。

（29）拙稿「実業学校における「花」「茶」の受容　―滋賀県愛知郡立愛知実業学校女子部を事例に―」（『愛知川町史研究』第二号　二〇〇四年）。

（30）例えば明治末期、京都府立第一高等女学校校長の河原一郎は、学課外に園芸・養鶏等を取り入れた。また余力があれば積極的に副業に携わるよう説いている（拙稿「高等女学校における「花」・「茶」の受容　―高等女学校令施行後、大正期を中心に―」『女性史学』第一二号　二〇〇二年、四八頁）。

（31）「生花（せいか・しょうか）」は、「花」（いけばな）の様式の一つ。一般的に真・副・体など三つの役枝によって不等辺三角形を構成し、それを水際一本にまとめた形式のもの。「花」の様式には他に「立花」、「盛花」（水盤形式の花器に盛るという手法で洋花などを入れる形式のもの）などがあった。大正九年、滋賀県長浜町立長浜高等女学校では夏期休暇中の一週間、「盛花」の講習会が開かれている。

（32）明治三二年二月二五日制定文部省令第九号『明治以降教育制度発達史』第四巻（文部省内教育史編纂会編修、龍吟社、一九三八年（のち芳文閣より復刻））四八六～四九〇頁。

（33）明治三五年一月一五日制定文部省令第一号『明治以降教育制度発達史』第四巻（文部省内教育史編纂会編修、龍吟社、一九三八年（のち芳文閣より復刻））五八二～五九〇頁。

（34）『高等女学校関係法令の沿革』調査資料　第二輯（文部省教育調査部、一九四一年）一五頁。

（35）『文部省例規類纂』第三巻（文部省編、一九二四年）四二三頁。

（36）『高等女学校関係法令の沿革』調査資料 第二輯（文部省教育調査部、一九四一年）一四七～一五一頁。

（37）「花」「茶」の受容は愛知高女だけでなく、大津高等女学校、彦根高等女学校ほか多くの高等女学校においても同様に、随意科目（正課学科目）としてではなかった（拙稿（30）に同じほか）。管見の限り非常に稀な例として、滋賀県蒲生郡日野町立日野女子手芸学校が、大正三年滋賀県日野町立日野実科高等女学校と改組し、大正九年滋賀県日野高等女学校と改組する迄の六年間、本科、補習科共に随意科目として「花」「茶」を設置した例がみられる。しかし大正九年以後は「花」「茶」は課外に置かれた（『近江日野町誌』巻中（滋賀県日野町教育会、一九三〇年）、二九二～三〇〇頁）。

（38）拙稿（30）に同じ。

（39）「女子と幸福」『愛声』第三号（大正一四年一〇月二五日発行）、「会員消息」『愛声』第九五号（昭和九年三月一五日発行）、「女性の教養」（五年 小山喜美子）『期刊愛声』（昭和二二年三月一〇日発行）ほか。同様のことは、他校においてもいえる（拙稿「校友会誌「岸乃姫松」にみる泉南・岸和田高等女学校 ―校長の言説と「花」・「茶」の受容を中心に―」『和泉高校百年誌』大阪府立和泉高等学校校史編纂委員会編 二〇〇一年、九一二頁ほか）。

（40）大正一一年開校時から昭和一三年の本人逝去に至るまで、「茶」を教えたのは、塚本和兵衛（「茶道伝授、大日本総華督」）であった。流派名は記されていない。（『愛声』一三九号（昭和一三年五月一五日発行））。

（41）「五、本校の教育方針」『愛声』一〇五号（昭和一〇年二月一五日発行）。また「わが校の一日」（吉村作一校長）『愛声』一二七号（昭和一二年四月一五日発行）によれば、第五時限の後、校舎内の清潔整頓と校地の除草や園芸の手入れのため、「作業時限」が三〇分間設けられていた。

なお吉村作一校長は、在職期間：一九三五（昭和一〇）八月～一九三九（昭和一四）四月。在職年数：三年八ヶ月。前任校：滋賀県虎姫中学校教頭。転任校：滋賀県八幡高等女学校校長。

（42）「高女生も日桶かついで 愛知川町の巻」『大阪朝日新聞京都附録』昭和一〇年一月一七日発行。また卒業生の思い出にも、勤労作業や農業実習に時間が費やされたことが語られている（『創立八十周年記念誌「愛知」』滋賀県立愛知高等学校八〇周年記念誌「愛知」編集委員会編、滋賀県立愛知高等学校、一九八九年、三六～三九頁）。『創立九十周年記念誌「愛知」』滋賀県立愛知高等学校九〇周年記念誌「愛知」編集委員会編、滋賀県立愛知高等学校 一九九九年、五九～六〇頁）。「卒業生婚嫁先職業別」（『十五年小史』五〇頁）によれば、愛知高女卒業生の婚嫁先職業は、農業は医師、僧侶と同じく五％程度と少なく、最も多いのが会社員及び店員の三〇％、次が商業の二九％、教員の一一％と続いている。このことから同校が農業教育を重視したことと、婚嫁先職業との関係は見出せない。

（43）「上級学校及補習科入学者」『愛声』二〇号（昭和二年四月一五日発行）。

（44）「錦郷会報」『愛声』四九号（昭和九年二月一五日発行）。

（45）「新聞閲覧台　愛知高女の試み」『大阪朝日新聞京都附録』昭和一〇年五月三日発行。

（46）「短期女学校開校に就いて」（笹川新太郎校長）『愛声』五六号（昭和五年七月一五日発行）。短期女学校は、滋賀県下において同様に、彦根、大津、長浜、日野の各県立高女の外、女子師範、大津市立、八幡、草津の各高女において開催されている（『愛声』八八号、昭和八年七月一五日発行）。

（47）「短期女学校開校に就いて」（笹川新太郎校長）『愛声』七八号（昭和七年七月一五日発行）。

（48）渡辺洋子『近代日本女子社会教育成立史　処女会の全国組織化と指導思想』（明石書店、一九九七年）、片岡重助『新時代の処女会及び其の施設経営』（大正一二年）（『近代婦人問題名著選集続編』第六巻、日本図書センター、一九八二年）を参考にした。

（49）『十五年小史』二四・三四頁。同年同様に大津高等女学校、彦根高等女学校も加入している。愛国子女団については、飛鋪秀一『愛国婦人会四十年史』（愛国婦人会、昭和一六年）（『愛国・国防婦人運動資料集　2』日本図書センター、一九九六年、五三八～五四五頁）を参考にした。

（愛知川町史調査員）

『愛知川町史研究』第二号　目次

調査研究報告
自治体史編さんの専門的能力の形成過程　渡部　幹雄
神仏分離および廃寺に伴う地域の仏像受容　福持　昌之
－大隠神社の氏子地域と福泉寺－
実業学校における「花」「茶」の受容　小林　善帆
－滋賀県愛知郡立愛知実業学校女子部を事例に－
特集　自治体史の調査合宿
特集にあたって　町史編さん室
－愛知川町史調査合宿の継続とその経緯－
このほか、当町史調査員など7名の文章を収録。
編さん事業報告
再録　愛智の雫　－町史編さん室から－
町史編さん日誌
編集後記
報告書
愛知川町荘園故地　水利地名調査報告書
－愛智荘・大国荘域を想定して－

（愛知川町教育委員会　町史編さん室、二〇〇四年三月発行）

お問い合わせは、愛知川町教育委員会　町史編さん室まで。